



# 小石の波紋

猪川 守

第二次世界大戦が終わって2年目の昭和22年、日本で最高のベビーブーム時代に私も生まれました。

日本で一番人口が多くなった時ですから、学校も校舎が足りなくてプレハブ校舎の中にギユウギユウ押し込まれました。頭にはシラミがわいている子が多くて進駐軍が来てDDTぶっかけられたり、脱脂粉乳の給食が始まった時代です。

その頃、夏時間という制度が取り入れられました。夏の一定期間、標準時をくりあげるのです。すぐ中止になりましたが、サマータイムとか言うて。。。父親が「サンマタイムって今頃進駐軍ではサンマがとれるんかいな」って言うてましたよ。

私のうちはもともと農家で、祖父が山の木こり、戦後父は志願して入った海兵隊から戻り、運送業をしていました。馬車ではまどろっこしいと思

つたらしくトラックを買いました。それが炭の木炭ガスで走る車なんです。その頃トラックの運転手は、今の飛行機のパイロットくらいに憧れの的だった。僕は「大人になったら何すんの」と聞かれたら、すかさず「運ちゃん」と答えたものでした。

四国でこの運送業が倒産して、その後、林業に携わりました。廃墟と化した日本の各都市では木材が飛ぶように売れる。連日連夜遅くまで製材して京阪神に向けて貨車運送するのです。

働けば働くだけ、ボロ儲けしたわけです。

当時は百円札だけで、労働者の日当は240円、ニコヨンと呼ばれていました。千円札はまだなかったので家の筆筒の引き出し、どこをあけても百円札がぎっしり詰まってたんです。私はおやつが欲しくなると一番上の小引き出しをあけ、バレないように下のお札を何枚かひっこぬいて店に走った

ものです。

父は太っ腹な人間でしたから、四十人ほど若い従業員を連れて愛媛県松山市の道後歓楽街に行き、芸者を集めてドンチャン騒ぎをしていました。炭俵2俵にお金を入れて足で踏み込みぎっしり詰めて、トラックにポンとのせて、店に持って行く。最初はみんなドロドロの汗臭い作業服の男たちが行くでしょ。嫌がる訳ですよ。

ところが竹ざるにお金を入れて床の間から花咲かじいさんみたいな格好してお金をバラまくんです。

芸者さんたちがキヤーキヤー言いながら、寄つてたかつてそれを拾う。お札の詰まった炭俵を部屋の真中にドンと置いて、料理や酒をどんどん頼む。飲み放題、食べ放題、歌っ



て踊って贅沢三昧遊んだらしい。こんな気前のいい客は道後温泉始まって以来初めてだと言われ、大得意だったのです。

父は材木屋だったから木（氣）も多かったのか女にだらしがなく、結局酒と女に溺れていきました。元海軍さんで恰幅はいいし、ハンサムで、凛々しい、その上職人かたぎで立派な仕事はするし、金もあるということで大モテだったのです。私が三才、妹が一才の時、台所と居間の間の障子に味噌汁がぶっ掛けられ、どなり声がして茶碗が割れ、汁の具が引っ掛かっていた光景が今だに脳裏にはつきり焼き付いています。父の女性関係に耐え切れなくなつて、その日以来、母親はいなくなりました。

「垂乳根の母、去りゆきぬ、赤子おき」。垂乳根（たらちね）とは母の枕ことばで、年とつて垂れ下がった乳房のことではなく、赤ちゃんを胸に抱いてしたたるような乳を飲ませる母親の姿を表わしているのです。「女がその乳のみ子を忘れて、その腹の子を、あわれまないようなことがあるうか。

たとひ彼らが忘れるようなことがあつても、わたしは、あなたを忘れることはない。」（イザヤ 49ノ15）私の生みの母は、乳飲み子の妹と私を連れて家を出ようとしたが、許されず、離婚となつてしまつたようです。二人の愛し子と別れるに忍びず、この子と共に死のうか何回も私たちを連れて海に行つたらしい。でも子供を殺すことはできなかつたのです。「三つ子の魂百まで」と言いますが、あの母の姿が消えた日の思い出は、この年になつてもはつきり甦つてきます。

その後、三、四人「今日から私があなたのお母さんですよ」と名乗る女性が出たり入つたりしていました。

「今日からあなたのお母さんつて変わったこというひとだなあ」と思つたものです。近所の友達の家では、いつも同じお母さんがいる。それで「お前んとこな、前からずっと同じお母さんか？ ちよつとおかしいんじゃないか？」と言つたくらい母親はいつも変わるもんだと思うようになってい

ました。

父は月にだいたい一石（一升ビンで約100本—180ℓ）の酒を飲み、殆んどご飯や野菜を食べない。たまに里芋を食べ、おかずは肉ばかりでした。

仕事は建築請負業、材木屋、それに造園業にも手を出し、とうとう手を広げすぎて倒産、差し押さえで家じゅうの家具にベタベタ赤紙が貼られました。

あの頃の借金取りは抜き身の日本刀を持って毎朝五、六人でやって来るのです。「金払え!」「出てこい。たたつ殺したる!」と怒鳴る中で私は大きくなりました。三回ほど倒産しましたから。



当時小学校の同級生は108人。それで成績はいつも106番か107番。

ビリになるのは難しいですよ。担任の先生は「お前は絶対、高校には進学できる」と太鼓判を押しました。これではいかんと思いつつも、遊ぶ方が面白くて山に行つては木登りして、木の実を食べ、

川に行つては手づかみで魚をとっていました。

中学二年生で割り算と掛け算を覚え、やっとやる気が出てきました。学校が合併して300人ぐらいに人数が増えましたが今度は上から50番ぐらいのところに入り、県立高校に受かりました。小さい時に、野原や山、川を駆け回って足のつばをうんと刺激してホルモンが出され、一番いい成長促進剤



となったのでしよう。

終戦後、あまり食べる物もなかった時代でしたが、あの頃の子供たちはみんな目がキラキラしていました。

父親は何十億の借金をかかえ61歳で、脳溢血で亡くなりました。父親の口癖は「お前な、言うとかけど、金のないのは、首のないのと同じ」「男はな、白い歯見せたらいかん」と。引き締まった顔して笑顔など見せず、人になめられないように生きる。人間は金さえあれば何でもできると考えていたのです。

毎日朝から晩まで働き尽くめ、日曜、祭日、盆も正月もあつたもんじゃない。必死で働いて、結局死ぬまで働き続けました。広大な土地、家すべ



て抵当に入れたため全部取り上げられ、莫大な借金を残して死んでいったのです。

「そこで、わたしはわが手のなしたすべての事、およびそれをなすに要した労苦を顧みたとき、見よ、皆、空であって、風を捕えるようなものであった。」（伝2ノ11）父は全くこの聖句にあるような空しい人生を送りました。

父親がまだ生きているころ、家族会議が開かれ、私は長男でしたが、「お前、家から出て行ってくれ」と継母に言われました。

一番末の妹は母親違いで京大理学部出の人と結婚していました。私は私立の三流大学を家庭の事情で中退、親の目から見ても京大出の方が優秀や思ったんでしょう。そういう訳で末の妹のダンナを跡継ぎにするためには私が邪魔になった。私は着の身着のまま、すべてを捨てて出て行きました。

ポケットには三百円しかなかったので、  
コッペパンと卵一個買って食べたら残り  
は二百円そこそこ。バスに乗っても遠く  
には行けないので、西条(さいじょう)市  
という隣町に行きました。高速道路の工  
事をやっていたので、土建屋さんの事務  
所に行き、飯場(はんば)に入れてもらい  
ました。食事は食べさせてくれるし、布団  
も貸してくれて、寝泊りができる。体力には自信があつたから真面目に一  
生懸命働いて、何とか一人暮らしてできるようになりました。

起きて半畳、寝て一畳、裸で生まれ、裸で死ぬ。人間生きるのに多くの物  
は無用と考えていました。人は酒が入ると、おとなしいネコが荒々しいト  
ラに変わって、人を蹴ったり、殴ったりするのを小さい時から見てきまし



たから、「俺は絶対酒飲みにはならんぞ」と子供心に決心していたのです。

土建屋の仕事からだんだん給料のいい、とび職に移り、アパートを借りて悠々と暮らせるようになりました。60メートルく70メートル、高い所では120メートルの高所ではたらいたこともありませう。そういう所に立つと風もないのに足もとが揺れている感じがします。いつも命綱はやってるけど、万が一足をすべらせて落ちると、シヨックで腹が裂け、腸、内臓がとび出すのです。目玉もとび出します。人の目は小さいように見えるでしょう。これが抜け出るとアヒルの卵くらい大きくて、それにゴムひもの様な神経がついてぶら下がっている。脳みそも飛び散って、電信柱などにくっついてるので、それをはがし、ビニール袋に全部集めて遺族の方に渡します。同僚が何人も落ちて始末させられました。

その様な事故が起こると、何時であつても、もうその日の仕事は終わり、とにかく飲みには走らないと気が落ち着かない。そして美味しい物があると聞

けば、どこまででも飛んでいきました。「明日の命はわからない。今日飲んで、食べて楽しもう。」というわけです。

二月頃のフグ、あれはおいしいですよ。

「フグは食いたし、命は惜しし」と言つて特においしいのが肝。そこに神経がやられる毒があるのです。フグのこと「鉄砲」と言うんです。あたつたら死ぬから。フグ調理師の免許を持っている上手な板前さんが料理してくれるのですが、それでもたくさん食べると舌がしびれてくる。「美味い。もう一皿だけ頼む」と言つても通いなれた店では出してくれませんでした。ただ食欲を満足させるために命がけでフグの鍋料理、鉄ちりなど食べるんですよ。生命保険に入つていても、いつも死と隣り合わせで、明日の命は誰も保証してくれません。家族もいない一人身なんだから、食べ放題、飲み放題でいつ死んでも本望だと思つていました。

とび職の給料は一日三万〜五万円、一ヶ月で手取り百万円くらいでした。飲み屋さんに払うお金は月四十万くらいでした。

父親のような人間にはなるまいと思っていたのに、気がついた時には、立派な大酒飲み、ネコトラになっていました。

私はよく関東に出張していました。そこから帰っても落ち着く所がないし、自分で炊事するのもうつとうしい。どこか泊宿できる所はないかと探していたら、愛媛県今治市山間部の玉川温泉郷にある旅館を紹介されたのです。そこを常宿としました。

温泉に入っては、上げ膳、据え膳でごはんを食べ、一杯飲んで寝る。その部屋の床の間に本が置いてあるのです。「これ何ですか」と聞いたたら「聖書ですよ！今晚牧師さんが来られますから、よかつたら一緒に聖書研究してみませんか」と誘われました。旅館のおかみさんはバプテスト教会の方だ

つたのです。晩酌やっつていい気分になっている時で、別に断る理由もなかったのですが、余興にちよつと顔をのぞかせたのが運のつき。その晩初めて聖書なるものとSDAの由利牧師にお目にかかることになったわけです。旅館の方はバプテスト教会員なのに、ずーつとSDAの牧師と家庭集会を開いていたのです。

神様は私が倒れる前に逃れの道を備えていて下さいました。「あなたがたの会った試鍊で、世の常でないものはない。神は真実である。あなたがたを耐えられないような試鍊に会わせることはないばかりか、試鍊と同時に、それに耐えられるように、のがれる道も備えて下さるのである。」（第一コリント10ノ13）



出張先の千葉の旅館で風呂からあがつて晩酌やっつている時、脑梗塞で倒れ、救急車で運ばれて気がついたらベッドの上、裏山

のウグイスが鳴いて目覚めました。「あれ、俺、こんなところで何しよるん。早く仕事に行かなきゃ」と思い看護婦さんに「靴出して下さい」と言う。「歩けるんですか」と聞かれた。「歩けるも何も四十五年間歩いてきたでしょう。今更何を言うんですか」と答え起きようとしたら手も足も全く動かない。自分の体でありながら、突然自分の意志で指一本動かせない体になった状態を理解するのにはばらく時間がかかりました。

それから四国の病院に帰り本格的なりハビリが始まるのです。三ヶ月くらいして、やっと自分で歩けるようになってトイレに行ったときのことを今でも忘れられません。誰にも付き添われずに、自分でトイレに立った時は本当に感動して、泣きながら用を足しました。当たり前と思っていたことが全然当たり前ではなく、神の恵みによって生かされている事を実感させられました。自分一人で生きていると思いがついていた心を砕くために神様は病気にしてくださったのです。

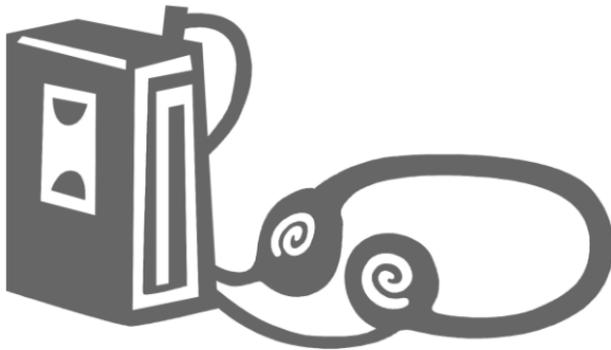


何といつても寝たきりになって一番みじめなのはトイレとお風呂です。オムツは一日に一度しか取り替えてくれません。尿は管を入れて袋にたまっていく。大が出たら気持ち悪くて大変です。お風呂は、お風呂に入るなんてみじめやない。ゴムマットを敷いた台の上に乗せられ、二、三人がかりで天井からのシャワーでジャージャー洗われるのですが、人間ではなく魚市場のマグロと同じです。本当に恥ずかしくみじめな思いでした。このようにマグロ扱いされて、私のプライドっちゅうのが打ち砕かれました。十字架のイエス様もこれ以上の扱いを受けられたのです。

健康と金儲けには自信満々の私でしたから、一日に二十本入りタバコ五箱、ビール八本酒三合、仕上げにウイスキー三杯、それからラーメン一杯食べる。そして美味しい物を食べ歩き、その結果がこれだったのです。

今治の病院に転院して間もなく、思いがけず又由利牧師がお見舞いに来て下さいました。

それが毎日来るのです。「この人けつたいな人やなあ」と思いました。最初は先生にいただいた聖書を読んでみましたが、ちつとも面白くない。弟が兄貴の相続権をだまし取ったとか、ロトと娘たちの近親相姦によって生まれたものが、モアブ、アンモンの先祖になったとか、子供を食べた話とかこれは犬畜生だ、読む必要ないとやめました。ところが敵もさる者、由利先生は「ではテープを聞いて下さい」と持つてきました。ウォークマンまで買い添えて。断る理由も見つけられず頂いて、聞いていたら入院中に何とりんどご箱一杯のテープ



がたまっていました。

普通の人は一週間に一度安息日の礼拝説教しか聞きませんよね。でも一日中朝から晩までテープ聞いている私は毎日「あめつちこぞりて…」と礼拝でした。

柴田栄二先生は東北弁なまりの、涙の出るようないいお話をされました。初めは何のことかわからなくても、聞いているうちに点が線になり、線がつながって円になり、次第にはつきりと意味がわかってきました。引用される聖句にも興味を持つようになって聖書を読むのが好きになりました。

退院後、お見舞いのお礼に教会へ行ったのを機に、教会での礼拝および信徒との交わりを持つようになり、後日バプテスマを受けることになりました。手術後、満開の桜の下で深呼吸した時の空気の美味しかったことが昨日のように思われます。これまで空気が美味しいなどと思ったことは一

度もなかったのです。

退院して仕事を求め職安通いが始まりましたが、36回断られ37回目に仕事を与えられました。この37回目の仕事がビルメンテナンスの仕事（公立病院の管理）でした。これは、心臓外科に入院中、退院後のことをあれこれ思案していた時、作業服の高齢の人が来て天井の蛍光管を交換するのを見て、これなら自分にもできるのではと思い、何か資格が必要ですか？ と聞くところ、ポイラー技師の免許があると有利とのこと、妹に頼んで本を買い、入院中に勉強して退院後免許を取得し、これが就職に結びついたのです。

それから、この会社（中堅のビル管理会社）に四年勤務しましたが、その後この会社が病院とトラブルを起こし、契約を解除される事態となりました。仕事の存続のために会社を設立し、この契約を入札で落札して、この病院と契約を締結。社員6名の有限会社、（有）内海企構（うちうみきこう）の代表取締役役に私が就任して6年勤務しましたが、この時、病院側の代表

の話では、このようなことは前代未聞であり過去に例がないとのことでした。例のないことが実現したのです。

この時、私はすでにクリスチャンになっていました。このように身体に障害のある者が50を過ぎて就職でき、しかも土曜安息日を10年もの間守ることができたことは、奇跡としか言いようがないことでした。尚、人々に仕事を与えることまで出来たことは感謝でした。「イスラエルの神はほむべきかな。」

その後、事情により安息日を守ることができなくなり、退職を決意いたしました。

このように退院後、就職してからも、何とか御言葉にぶら下がりたいなと思って車にラジカセをつけ、仕事や買い物行き帰り、少しの時間でも聴きました。そのテープの中に小田彰先生や金城重博先生のがあったので

す。この話はいいなと思つたらダビングしてマスターを作っておき、何回も聴く。ちぎれるまで三百回も聴きました。讃美歌とメッセージの組み合わせは人の心にグリーンと入ってきますね。

ローマ書十章十七節に「信仰は聞くことによるのであり、聞くことはキリストの言葉から来るのである」とあります。座って読む暇がない時でも、ドライブしながら、皿洗いしながら、メッセージに耳を傾けることができます。ニューメディアを活用してこの面での伝道に力を入れることはこれからとても大切な事だと思います。テープにすれば、日本全国どこか、世界中で説教していることになるのです。聞いて感動した人はそれをダビングして次々回していくのです。池の中に投げ込まれた小石の波紋が隅々まで広がり伝わっていく様に、これは必ず大きな影響を及ぼしていくでしょう。若い人たちの特別讃美歌とメッセージの組み合わせ、技術者、スタッフの養成を急ぎましょう。牧師、二、三百人分の働きをしますよ。

「求めよ、そうすれば与えられる」これも聖書に書いてあるとおりです。由利先生の集会所で広島三育から来た小林義和先生が使ってる聖書を見て、「あっ、これはいい。自分で聖書研究できる。こんないい聖書誰が作ったんだろう」と見たら、サンライズ・ミニストリーと書いてある。「サンライズならいつもテープ聞いている金城重博だ。この人がこれ作りよったんだ」と分かったのです。そして結婚するため沖繩にきて礼拝に出席したら、なんと何百回も聞いたテープのあの張本人がしゃべりよる。何本ものテープで声から話の内容まで全部覚えるほど知りぬいているので、初対面とは思えませんでした。

聖書を学んでここをもっと深く知りたいと思ってい



ると、アンカーやその他の資料、テープが送られてくる。もうその日のうちに読んだり聴いたりしました。

求める物は必ず与えられる。これは不思議ですね。私は自分で立てた人生の計画すべてゼロになって半身不随と戦い、涙が出るほど苦心してリハビリに励み、やっと一人歩きできるまでに回復したと思ったら次は「心臓が悪いから即刻手術しないと危険です」と言われたのです。全く、脳天ぶん殴られたような感じでした。俺の人生もこれで一卷の終わりだと思ったんですよ。でも手術の時は神にゆだねて何の不安もありませんでした。

循環器専門の個人病院で、五千人くらいの心臓手術をしてこられたという腕のいい先生に診て頂きました。心臓には四つの部屋があって、四つの弁があるわけですけど、私はその三つまで悪かったんです。僧帽弁、三尖弁、大動脈弁の三つです。

全身麻酔かけられ心臓をとり出し、僧帽弁、三尖弁の二か所を人口弁にとりかえました。大手術なので妹がきてくれ、後で言ってたことは「あんちやん、手術室入ってから出てくるまで13時間かかったよ」と……

心臓を取り出して弁置換している間は人工心肺って機械で血液と空気を肺に送るわけです。

その大手術が終わったあと集中治療室に二日入っていたんですが、意識が戻る前にこういうことがありました。

私の目の前にモクモク、フワフワツと雲がいっぱいあつて、そこをドンドン上に昇っていくんですよ。「うわあ、遠くまできたなあ。ちよつと疲れだから休もう」とちよつとそこにあつた石の上に腰かけました。あたりを見ると赤いチューリップがいっぱい咲いている。また目の前には小さな小川が流れその向こうは一面黄色い菜の花畑。「ああ、きれいだなあ、向こう

に行きたいな」と思って川を飛びこえようと思いました。でもその時のどが  
渴いたからとにかくこの小川の水を飲もうとした時、後ろの方から声がす  
るんですよ。「おおい、おおい」と言っているような……「こんな所人もいな  
いのに、誰かな？」と違って、ふつと振り返ったんです。「猪川さん、猪川  
さん、やっと気がつきましたね」とお医者さんがベッドの側に立ってたん  
です。もし、あの小川をポンと飛びこえていたら、私はもうここにいなかった  
たのかな。とにかくチューリップの赤と黄色い菜の花が今も鮮明に思い出  
されます。

意識がはつきりしてきて、見たら七夕のたんざくみたいに点滴の袋が何  
十本もぶらさがって、体中注射針とチューブだらけです。スパゲッティ症  
候群というそうです。鼻からもチューブが入ってて、声帯の中通って肺に  
空気送ってるので、全くしゃべれない。間もなく人工心臓からのチューブ  
をぬいて自分の肺で呼吸することになった。鼻から入れたんだから短いと

思ってたけど、ズルズルツとぬいたら何と一尋ひろ（1.8 m）ぐらいありましたね。手術する前に担当の看護婦さんが変なオモチャみたいの持ってきたんですよ。「これで呼吸の練習するんですよ。はい吸って、はい吐いて」と。50年生きてきて今更こんなつまらんことする必要ないとタカくくって、一、二回練習してやめました。呼吸なんか誰に教えられなくても赤ん坊でもできるじゃないかと思っただけです。ところが今まで無意識にしていた呼吸「吸って、吐いて」がこんなに大変なこととは知りませんでした。人工心臓から自分の呼吸に換える時、ちゃんと練習してなかったのでもうまく出来ず、窒息しそうになりました。

毎日当たり前に出来ていたことがこんなに難しい



とは知りませんでした。

こんな状態の時、見舞いに来て下さった由利先生は私の様子を見て、「あー、あの人はもうだめだ。社会復帰は無理だ」と思ったそうです。そのくらいひどかったんですよ。その後、今治教会牧師は、新垣三郎先生の次男、聡先生が着任されたので、父親が時々息子の様子を見に来ておられたんですよ。私が独り身と知って「猪川君、あんた奥さんもらわないのか」と聞かれました。「先生、もらわないんじゃないですよ。もらえないのです。きてくれる人なんかいません。」「何か問題があるか。」「別に問題はないんですけど、強いて言えば、お金と健康がありません。」「よし、わかった。私にまかせなさい。」と言ってくれました。

六歌仙で有名な「在原業平（ありわらのなりひら）」という歌人がいるでしょう。あの人が奈良の猿沢の池のほとりに庵をもっていてそこでこんな和歌を詠んでいるんです。

「手を打てば、下女は茶をくみ、鳥は立ち、鯉は寄り来る猿沢の池」

旦那さんが手を叩くと女中さんはお茶いるんかなとお茶の用意をして持つて来る。庭の小鳥は音に驚いてパツと逃げ去る。鯉はまた餌でもくれるんかなと寄ってくる。

ボンと叩くその音、その事態に対して人間、鳥、鯉各々が三者三様の反応をしているのです。

何のとりえもない弱り果てた私を見て「ここまで来たらもうダメだ。結婚どころではない」と反応するのが普通でしょう。しかし、「いや、俺が紹介する。あきらめるな」と励ましてくれる牧師もいたわけです。

何回か沖繩に呼ばれてお見合いしましたが、どれもうまくいきませんでした。三郎先生は「お見合いの時は何か話さないとだめだよ。おもしろい話せい」って言うから、この世の中の面白い話なんかない。だから自分の夢の

話をしました。夢は大きい程いいから大きな話したわけです。そしたら「あなたの夢は大きすぎてついていけません」と断られました。

その頃、新垣先生が「死刑囚から牧師へ」という本と「地獄の虹」を出版されて、その本を買って下さった方たちを中心に「虹の七色会」という聖書研究会が始まったのです。求道者の方々も含めて月に一回集会を設けていました。その集いに私もお見合いがてら出席し、咲子さんとめでたく結ばれることになりました。

「お金はありません。健康もありません。でも神様に生かされている事を知らされた私には大きな夢があります。」こんな私を快く受け入れてくれたのが咲子さんだったのです。

私の人生に於ける数々の人々との奇しい出会いを心から感謝しています。

補遺：

猪川咲子

結婚する前、主人とは二度の出会いがありました。沖繩旅行の時に由利先生が主人を連れて私の家に宿泊したのです。由利先生は猪川が結婚したい旨を話しておられましたので、「先生、私に任せてください、いい方をご紹介いたします」と言い、その後二人の方にお話しいたしましたら、二人とも結婚はしたいけど本土は寒いからと断られました。

二度目は新垣三郎先生のご自宅で「虹の七色の会」に出席した時に、そこに主人がお見合いのために本土から来ていました。主人は合計で10人ほどの人に断られているようでした。私は紹介する方だったのに、まさか主人と結婚することになるとは夢にも思っていませんでした。兄弟たちは私の事を心配して大反対。私も気が重く、この結婚はみ心ではないのかと応接

間のソファアに座り考え込んでいると、イザヤ41章の10節〜13節の聖句が与えられました。私はすぐに立って行き、そこに何が書かれているかを確かめるため、食卓テーブルに腰掛けその聖句を声を出して3回程読みました。「恐れてはならない、わたしはあなたと共にいる。驚いてはならない、わたしはあなたの神である。わたしはあなたを強くし、あなたを助け、わが勝利の右の手を持って、あなたをささえる。…あなたの神、主なるわたしはあなたの右の手をとってあなたに言う『恐れてはならない、わたしはあなたを助ける』」。

すると、今まで兄弟の反対にびくびくしていたのに、その恐怖が吹っ飛んでしまい、まさに神様から私に与えられたみ言葉であることを確信し、主人から電話があつた時、「私は決心しましたので、ご安心ください」と伝えました。兄弟たちは結婚式には出席しませんでしたが、御祝儀はちゃんと下さりその代わり甥や姪、またその子供たちが全員出席して私を祝福

してくれ、ほんとに感謝でした。また、遠くから近くからもお祝いに出席して下さり、特に名護教会の皆様方には大変お世話になりました。今でもその時のことを思い出すたびに感謝の気持ちで一杯です。

「神のなされることは皆その時になんて美しい」(伝道の書3章の11節)



「わたしたちは古代の聖者によつて知らされた神の恵みを認めなければならぬが、最も有力なのは自分自身の体験のあかしである。自分の中に神の力が働いていることを表わすとき、わたしたちは神のために証人となるのである。人間は各自、他のすべての人とは異なる生涯を送る。その体験も本質的に他の人とは異なる。神はわたしたちの賛美が、わたしたち自身の個性を表わして神にささげられるように望んでおられる。キリストのような生活を送るとともに神の恵みの栄えを賛美する尊い告白は、人々を救うために抵抗できない力となる。」

ミニストーリー・オブ・ヒーリング 70・71